

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 29 日現在

機関番号：14503  
 研究種目：基盤研究(B)  
 研究期間：2010 年 4 月 1 日 ～ 2013 年 3 月 31 日  
 課題番号：22320089  
 研究課題名（和文）  
 コーパス利用による英語の通時的・地域的変異の融合的研究  
 研究課題名（英文）  
 Corpus-based Study of the English Language Integrating Diachronic and Diatopic Variations  
 研究代表者  
 谷 明信（TANI AKINOBU）  
 兵庫教育大学・学校教育研究科・教授  
 研究者番号：90236670

研究成果の概要（和文）：従来の英語史の研究では、15 世紀に成立し始めた標準英語を中心に研究がすすめられることが多く、通時的な変異と地域的な変異の関係などについては十分に検討がなされてきたとは言いがたい。しかしながら、最近では、標準英語を中心とした英語史のみならず、地域的な変異すなわち英語の方言での歴史的研究を含めた、多くの人々の声の言語の歴史を検討する研究の必要性が叫ばれつつある。本研究は、コーパスを利用することにより、通時的な変異のみならず、地域的な変異をも検討することで、通時的変異と地域的な変異の関係に従来以上に焦点をあてることで、英語史のより良い理解に貢献しうることが照明した。

研究成果の概要（英文）：Previous studies in the history of the English language do not necessarily pay due attention to the diachronic and diatopic variations in the language because of their focus on Standard English emerging from the fifteenth century. Recently, however, there has been a call for the need to explore the many-voiced histories of the English language including regional developments. The present research has demonstrated, in the past three years, that more focus should be placed on the link between diachronic and diatopic variations in the historical study of the English language, and that such a focus can contribute to a more profound understanding of the English language in its historical aspects.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2011 年度	6,100,000	1,830,000	7,930,000
2012 年度	3,300,000	990,000	4,290,000
年度			
年度			
総計	12,200,000	3,660,000	15,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：3203 英語学

キーワード：英語史・コーパス言語学・英語方言学・通時的変異・地域的な変異

## 1. 研究開始当初の背景

従来、英語史の研究では、15 世紀に成立した標準英語を中心に考察する傾向が強く、地域的な変異の研究は、方言の理解のためのみに用いられがちであった。しかしながら、方言

での言語変化を含めたより多面的なアプローチの英語史研究の必要性が近年叫ばれつつある。このため、英語のコーパスを利用し、通時的・地域的な変異の検討を統合することで、より多面的な英語史研究を行うことができ

る可能性を考慮し、コーパス言語学および古英語、中英語、近代英語、現代英語を専門領域とする谷、今井、西村、家人、尾崎、澤田、柳、内田、矢橋の9名で、3年間の研究を開始することとした。

## 2. 研究の目的

従来の英語史研究においては、標準英語を中心とする画一的な視点から研究する傾向が強かったことは、「研究開始当初の背景」で述べた。しかし、近年、方言や基層となるケルト語などの影響を形態や統語の面で重視する研究がなされつつあり、標準英語のみならず、方言を含めた英語の歴史的発達の多角的理解を求める傾向がみられる。また、特に中英語においては、*LALME (Linguistic Atlas of Late Medieval English)* や *LAEMEA (Linguistic Atlas of Early Middle English)* の出版・公開に伴い、形態論や統語論の分野においても、地域の変異を研究しうる可能性が高まり、また、Innsbruck 大学で作成された中英語散文コーパスなどにより、方言的な要素を研究することがより実現可能となる環境が整いつつある。よって、本研究では、英語史における通時的変異のみならず、通時的変異と地域の変異やジャンルなどの変異との関係にも十分注意を払った研究を行うことを目的とした。

3年という限られた時間の研究では、英語史の全ての時代を網羅的に行うことは困難であるので、研究組織のメンバーのそれぞれ得意な時代と領域を研究して、それらの統合により英語史全体を見通すこととした。

## 3. 研究の方法

研究当初に、本研究の目的・方針を研究者間で確認したのち、各研究者の専門とする時代のコーパス（あるいは電子テキスト）を選定し、地域の変異にも注意を払いながら研究を進めるという方法にした。また、研究を促進するために、2年目の2011年に大阪で国際学会の開催を企画し、それに向けて研究を進め、本研究組織の研究者がそこで研究発表を行い、国内外の研究者と学術交流ならびに意見交換を通して、研究の推進と深化を行うことを計画し、これを実現した。この学会の際、研究組織のうち、6人が発表を行い、同時に全員の研究の経過を報告しあい、また、海外より5人のコーパスを用いた英語歴史言語学の世界的研究者(Irma Taavitsainen, Manfred Markus, Mark Davies, Jeremy Smith)を招へいし、学術交流も行った。

## 4. 研究成果

上記の目的と方法により、研究代表者の谷は中英語を、研究分担者の尾崎は古英語を、今井と西村と家人と澤田と柳は中英語を、矢橋は近代英語を、内田は現代英語を担当し、それぞれの時代の語彙や統語の分析を行い、その研究成果を論文等を通して発表した。

ここでは、(1)主な成果、(2)国内外におけるインパクト、(3)今後の展望について、以下論じる。

### (1) 主な成果

本研究を通して、通常、方言との関係であり論じられることのない英語史の現象が実は、英語の通時的変化と関係があることが、明らかできた場合がある。標準語化が始まる15世紀前には、この点がより明白である。しかしながら、同時に英語における標準語化が書き言葉にもたらした影響の強さも、逆に明らかになった。

地域の変異が英語の通時的変異と関わりがある例として、動詞 *wit* が同義的な *know* に取って代わられる歴史的過程での地域の変異と、標準語化との関わりを調査した本研究の一つを例にとり、論じる。

動詞 *wit* が中英語を通して、徐々に同義的な *know* に交替していく歴史的過程は Rissanen (1993) により論じられているが、方言との関係はあまり議論されていない。しかしながら、インスブルック中英語散文コーパスの年代と方言のパラ미터を用いることで、*wit* が特に East Midland 方言で世紀を通じて頻度が高いことが明らかになった。また、East Midland 方言の中でも、*wit* の生起数の特に多い15世紀の *Paston Letters* では、書簡の冒頭部で使われる定型表現に含まれる *wit* の使用のために、頻度が高くなるというジャンルの要因が一因であることも解明した。一方 *know* は London 方言において、14世紀以降に非常に頻度が高く、正規化頻度において *wit* の約2倍の頻度があること、また、南部方言でも15世紀に高頻度であることも明らかになった。このように、*know* の使用拡大が、実際には英語の標準語化がすすむ London 方言との関わりが密接であったという点は、従来指摘されていないことである。一方で、*wit* は主に北部で残存し、それが19世紀の方言辞書 *English Dialect Dictionary* での方言での残存の指摘や、『現代スコットランド語辞書』での項目などに反映されていることも明らかにした。

また、Rissanen は、イディオム化が *wit* の衰退の原因と主張していたが、そのイディオムと指摘されていた項目自体の修正を行うとともに、その多くが、実は主に談話的機能で使用されるものであることも解明した。

このように、本研究では、通時的コーパスを用いることで、通時的変異と地域的変異の

関わりを、量的にも明らかにすることもできたと言える。

### (2) 国内外におけるインパクト

国内と国外のインパクトに分け、述べる。国内におけるインパクトについては、時間的変異と方言的な変異やジャンルなどの変異の関係に注意を払うことが英語史の多面的理解に貢献することを、個々の研究成果を通して、示したことである。さらには、コーパスや電子コーパスを用いることで、そのような研究を促進できることを示したことである。また、のちに述べる国際学会において、多くの国内の研究者とも交流したことで、本研究の成果を共有することができた。

国外における影響については、本研究組織が 2011 年に大阪大学中之島センターで国際学会 MMECL 2011 (Middle and Modern English Corpus Linguistics) を主催し、研究組織メンバー中 6 名が発表を行い、本研究の成果を報告することができた。これにより、本研究ならびに日本の英語史研究の一端をこの国際学会を通じて、世界に発信できたと言える。しかしながら、東日本大震災の影響で海外研究者のキャンセルが相次ぎ、当初よりも海外の参加者が減少したことは残念であった。さらに、2012 年には、The 17th International Conference on English Historical Linguistics (University of Zurich, Switzerland) にも、本研究組織メンバーの 5 名が参加し、うち 2 名が研究発表を行い、研究成果を公開するとともに、海外の研究者と学術交流をさらに深めた。

### (3) 今後の展望

研究組織のメンバーの専門とする時代の不均衡のために、近代英語の研究が手薄となった。標準語化が 15 世紀にはじまったとは言え、初期近代英語ではまだまだ地域の変異が多く見られたと考えられる。したがって、今後、新プロジェクトを行う際には、特に初期近代英語の研究をより進め、15 世紀までの研究との連携を図ることで、通時的・地域的変異の関係をより深く考察できるように方策を考えるべきであろう。

今述べたことと直接関係するが、研究を進めるうえで、15 世紀における英語の標準語化により、近代英語以降では、方言的資料の少なさが問題となった。19 世紀になると Ellis や Wright の方言研究の資料があり、現代英語の方言も社会言語学的研究があるものの、中英語後期からの時間的なギャップが問題となった。英語における標準語化が非常に強力であるためだが、書簡などの特定のジャンルに研究の焦点を絞るなどの手段を講じることや、近代英語の方言コーパスを新たに作製することなどを今後の課題として、研究を継続している。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

- ① 今井光規 “Barbaric Figures in Middle English Metrical Romance”. *Conference Proceedings of The Fourth International Conference of the Taiwan Association of Classical, Medieval & Renaissance Studies*. 129-142. 2010. 査読あり.
- ② 今井光規 “Christians and Heathens in Middle English Metrical Romance”. *Setsuman Journal of English Education* 5, 1-16. 2011. 査読あり.
- ③ 澤田真由美 “Finite and Infinitival Complement Constructions in Chaucer.” *ERA* 28, 41-60. 2011 年. 査読あり.
- ④ 内田充美・山内真理 「持続可能な学習者コーパスの構築を目指して」『言語文化学研究 英米言語文化編』第 6 巻, 71-88. 2011. 査読なし.
- ⑤ 柳朋宏 「英語史における名詞句と格認可の変化について」*JELS* 28, 176-182. 2011. 査読なし.
- ⑥ 家入葉子 “Textual Transmission and Language Change in the Fifteenth Century: John Trevisa's Middle English Translation of Higden's *Polychronicon*”. *Memoirs of the Faculty of Letters, Kyoto University* 51: 107-128. 2012. 査読なし.
- ⑦ 尾崎久男 「中世ドイツ語における除外文 *es sei denn* について —否定辞の消失および副詞 *denn* の出現—」*Sprachwissenschaft Kyoto* 11, 21-29. 2012. 査読あり.
- ⑧ 柳朋宏 “Ditransitive Alternation and Theme Passivization in Old English”. *Outposts of Historical Corpus Linguistics: From the Helsinki Corpus to a Proliferation of Resources. search Unit for Variation, Contacts, and Change in English*. (ePublication) 2012. 査読あり.

[学会発表] (計 25 件)

- ① 谷明信 「グロッサリーでの phraseology の扱いについて」日本英文学会第 82 回全国大会 (神戸大学). 2010 年 5 月 29 日.
- ② 尾崎久男 「Caxton Glossary の作成に向けて」日本英文学会第 82 回全国大会シンポジウム (神戸大学). 2010 年 5 月 29 日.
- ③ 今井光規 “Visiting the Other World in Middle English Romance and its Reflection in a Present-Day American Novel”. *Nordic Conference of English 2010 (Oulu University, Finland)*. 2010 年 6 月 10 日.
- ④ 澤田真由美 “Finite and Infinitival Complement Constructions in Chaucer.” 広島英語研究会第 51 回夏季大会 (広島大学霞キャ

ンパス) 2010年8月12日.

⑤ 内田充美 「英語コーパス言語学の知見」 教員免許状更新講習「英語授業に役立つ先端的知識とノウハウ」(大阪府立大学). 2010年8月20日.

⑥ 澤田真由美 “Finite and Infinitival Complement Constructions in Chaucer” Hiroshima Seminar on the English Historical Linguistics and Medieval Language and Literature (広島大学西条キャンパス) 2010年10月16日.

⑦ 今井光規 “Barbaric Figures in Middle English Metrical Romance”. The Fourth International Conference of the Taiwan Association of Classical, Medieval & Renaissance Studies (台湾国立中正大学). 2010年10月30日.

⑧ 家入葉子 「Convince に続く不定詞構文の拡大——通史的な視点から」日本英語学会第28回大会(日本大学文理学部). 2010年11月13日.

⑨ 澤田真由美 “The Passive Infinitive after Directive Verbs in Late Middle English” 広島英語研究会第52回夏季大会(広島大学霞キャンパス) 2011年8月7日.

⑩ 谷明信 “Relationship between Late ME Religious Prose Texts: An Examination via Binomials”. MMECL 2011: Middle and Modern English Corpus Linguistics (Nakanoshima Center, Osaka University). 2011年8月26日.

⑪ 家入葉子 “From *Alway* to *Always* in the Early Modern English Period”. MMECL 2011: Middle and Modern English Corpus Linguistics. (Nakanoshima Center, Osaka University) 2011年8月26日.

⑫ 柳朋宏 “On the Subject Position of Passive Expletive Constructions in Middle English”. MMECL 2011: Middle and Modern English Corpus Linguistics Conference 2011 (Nakanoshima Center, Osaka University). 2011年8月26日.

⑬ 澤田真由美 “A New Infinitival Construction in Middle English: The passive infinitive after *suffer*”. MMECL 2011, Middle and Modern English Corpus Linguistics Conference (Nakanoshima center, Osaka University). 2011年8月26日.

⑭ 矢橋知枝 ”The Adjective Phrase and Eighteenth-Century Grammars”. MMECL 2011: Middle and Modern English Linguistics, Osaka. (Nakanoshima Center, Osaka University). 2011年8月29日.

⑮ 谷明信 基調講演「ワードペアによる後期中英語散文作品の分析: 現代英語との関わり」小学校英語教育学会(JES)愛知支部第19回研究会・LET 中部支部小学校英語教育研

究部会第60回研究会 及び、平成23年度日本教育大学協会研究助成「大学院レベルにおける英語内容学と英語教育学の協同による英語科の教員養成・教師養成の研究会」合同研究会(名古屋学院大学名古屋キャンパス) 2011年10月2日.

⑯ 柳朋宏 “(A)symmetries between Theme and Goal in Ditransitive Passive Constructions of OE”. Helsinki Corpus Festival: The Past, Present, and Future of English Historical Corpora (University of Helsinki, Finland). 2011年9月30日.

⑰ 家入葉子 「John Trevisa の翻訳による *Polychronicon* の言語——MS Cotton Tiberius D. VII とチャクストン版の比較」英語史研究会第21回大会(大阪大学言語文化研究科). 2011年10月8日.

⑱ 柳朋宏 「英語史における名詞句と格認可の変化について」日本英語学会第28回大会(日本大学). 2011年11月13日.

⑲ 内田充美 “Down the line at the end of the day, where spacial expressions end up”. The 19th Biennial Conference of the Linguistics Society of New Zealand (Victoria University of Wellington, New Zealand). 2011年11月18日.

⑳ 家入葉子 “Infinitives in Two Different Versions of Trivisa’s Middle English Translation of the *Polychronicon*”. The 10th Hawaii International Conference on Arts and Humanities. Honolulu). 2012年1月10日.

㉑ 西村秀夫 「大規模コーパスの威力」中部地区英語教育学会 三重支部例会(三重大学) 2012年1月28日.

㉒ 西村秀夫 「diachronic corpora の最近の動向」第2回熊本学園大学英語研究会 シンポジウム「コーパスと英語研究」(熊本学園大学) 2012年2月20日.

㉓ 内田充美 “‘Down the Road’ and ‘Down the Line’: Semantic Shifts of Prepositional Phrases in Present-Day English”. The 17th International Conference on English Historical Linguistics (University of Zurich). 2012年8月23日.

㉔ 柳朋宏 “From Dative-Marked Experiencers to Prepositional Experiencers in the History of English”. The 17th International Conference on English Historical Linguistics (University of Zurich, Switzerland). 2012年8月25日

㉕ 谷明信 “Revisiting the Obsolescence of the Verb WIT”. The 4th International Conference of Society of Historical English Language and Linguistics (Keio University). 2012年9月3日.

[図書] (計8件)

① 尾崎久男 「フランス語動詞 *approcher* が前置詞 *de* を従える理由: 類推および混淆の観点から見た一仮定」『言語文化共同研究プロジェクト2009: レトリックの文化と歴史

性』67-75. 2010.

② A.V.C. Schmidt・他(編)、谷明信(執筆)  
*From Beowulf to Caxton: Studies in Medieval Language and Literature, Texts and Manuscripts* (Peter Lang). 2011. 355 ページ.

③ 尾崎久男 「To wring one's hands について: 「手を揉む」あるいは「手を絞る」?」『言語文化共同研究プロジェクト 2010』 63-71. 2011.

④ Manfred Markus・家入葉子・他(編)、家入葉子(執筆) *Middle and Modern English Corpus Linguistics: A Multi-dimensional Approach.* (John Benjamins). 2012. 287 ページ.

⑤ 尾崎久男 「リンゴのような黄金?—古英語 *aeppled gold* の意味解釈—」『言語文化共同研究プロジェクト 2011』 1-7. 2012.

⑥ 尾崎久男 「太陽が昼の債権者に光の預金の払戻しに銀行を開く朝」—『五日物語』(*Il Pentamerone*)に見る擬人化表現— 『言語文化共同研究プロジェクト 2012: レトリックの伝統と伝搬』, 37-43. 2013 年.

⑦ 谷明信・尾崎久男(編), 谷明信・尾崎久男・柳朋宏・内田充美(執筆) 『15 世紀の英語—文法からテキストへ』(大阪洋書). 2013. 160 ページ.

⑧ 保坂道雄・小倉美智子・鈴木敬了・谷明信(編)、谷明信(執筆) *Phases of the History of English: Selection of papers read at SHELL 2012* (Peter Lang). 2013. ページ数未定.

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

○取得状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等 該当なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷 明信 (TANI AKINOBU)  
兵庫教育大学・学校教育研究科・教授  
研究者番号: 90236670

(2) 研究分担者

今井 光規 (IMAI MITSUNORI)  
摂南大学・学長  
研究者番号: 60034584

西村 秀夫 (NISHIMURA HIDEO)  
三重大学・教育学研究科(研究院)・教授  
研究者番号: 00164591

家入 葉子 (IYEIRI YOKO)  
京都大学・文学研究科・准教授  
研究者番号: 20264830

尾崎 久男 (OSAKI HISAO)  
大阪大学・言語文化研究科(研究院)・准教授  
研究者番号: 60268381

澤田 真由美 (SAWADA MAYUMI)  
愛知学院大学・教養部・准教授  
研究者番号: 60369791

柳 朋宏 (YANAGI TOMOHIRO)  
中京大学・国際関係学部・准教授  
研究者番号: 70340205

内田 充美 (UCHIDA MITSUMI)  
大阪府立大学・人間社会学部・教授  
研究者番号: 70347475

矢橋 知枝 (YAHASHI CHIE)  
仁愛大学・人間学部・准教授  
研究者番号: 10340035

(3) 連携研究者

該当なし